スポーツに対する興味と過去のスポーツ経験の関連性に関する研究

鳥取大学教育学部　福　元　和　行
山口大学教育学部　遠　藤　勝　恵

A Study on the Relationship between Interest in Sport and Past Sports Experiences

Kazuyuki FUKUMOTO*, Katsue ENDO**

I　研究目的

人々の具体的なスポーツ行動の生起には様々な要因が影響するが，心理的要因は看過できない重要な要因である。金崎はスポーツ行動にはスポーツに対する興味・関心，価値・態度，さらには個人的特性としてのパーソナリティーなどの心理的要因が重要な影響を及ぼしていることであろう[1]と述べ心理的要因の重要性を指摘しているが，スポーツに対する態度についてはスポーツの楽しさの認知とスポーツ経験との関係を分析し，報告した[2]。そこで，本研究ではスポーツに対する興味とスポーツ経験との関連性について分析を行う。

興味とは態度がより一般的な反応の準備状態であるのに対して，特定の対象に向けての明確な自覚を持った積極的，選択的な注意を関心という。これに，好き・嫌いの情緒的緊張が伴うとき，それを興味という[3]と規定されているが，スポーツに対する興味は，主体が，その外にあるスポーツをとりいれることによって，自分の均衡を得ようとする欲求の状態であり，スポーツを実践したり，見たり，聞いたりして楽しむ行動を起こさせる原動力であると考えられ[4]ている。

人々は過去において様々なスポーツを経験し，またスポーツ活動の場での様々な認知経験も持っているが，それらの経験がスポーツに対する好・嫌の感情を育み，スポーツに対する興味を規定していないだろうか。

本研究はこのような問題意識に立ち，過去のスポーツ経験及びスポーツ活動に伴う認知的側面とスポーツに対する興味の関連を検討することにより，いつ頃の，どのようなスポーツ経験及び認知経験が現在のスポーツに対する興味と関連が深いかを検討しようとするものである。

---

* Department of Physical Education, Faculty of Education, Tottori University
** Department of Physical Education, Faculty of Education, Yamaguchi University

Ⅱ　研究方法

1　データの収集

本研究では山口県教育委員会が1988年12月12日から1989年１月20日にかけて郵送法により県内の56市町村から人口の比率に基づき収集したデータの中から，男子163名，女子162名の合計325名分を採用し分析を行った。

表１　標本の構成

			男子		女子	
			N	%	N	%
１．年令		20才代	45	27.8	30	18.6
		30才代	52	32.1	59	36.6
		40才代	41	25.3	46	28.6
		50才以上	24	14.8	26	16.1
２．結婚		未婚	37	23.1	13	8.2
		既婚	123	76.9	146	91.8
３．末子年令		子供いない	35	23.3	23	14.5
		就学前	46	30.7	33	20.8
		小・中学生	39	26.0	52	32.7
		高・大学生	16	10.7	28	17.6
		社会人	14	9.3	23	14.5
４．職業	男子	農林・漁業	5	3.2		
		商業	20	12.8		
		事務職	47	30.1		
		専門管理職	12	7.7		
		土木・建設	18	11.5		
		公務員	9	5.8		
		無職・その他	45	28.8		
	女子	独身事務員			13	8.6
		専業主婦			59	39.1
		兼業主婦			79	52.3
５．居住地区		商・工業地区	13	8.2	8	5.1
		住宅地区	63	39.6	72	46.2
		農山漁村地区	83	52.2	76	48.7
６．通勤時間		15分未満	73	45.1	47	31.5
		15分以上30分未満	36	22.2	23	15.4
		30分以上	31	19.1	7	4.7
		通勤していない	22	13.6	72	48.3
７．平日の自由時間		３時間未満	82	50.6	61	38.9
		３時間以上４時間未満	43	26.5	40	25.5
		４時間以上５時間未満	37	22.8	56	35.7
８．休日の自由時間		４時間未満	30	18.5	61	39.9
		４時間以上７時間未満	44	27.2	51	33.3
		７時間以上10時間未満	42	25.9	22	14.4
		10時間以上	46	28.4	19	12.4

調査内容は山口県教育委員会が実施した「山口県民のスポーツに関する調査」[注1)]の調査内容の中から個人的属性に関して９項目，スポーツ経験に関して40項目，そして目的変数に関して１項目の合計50項目を採用し，分析に使用した。なお，目的変数であるスポーツに対する興味の有無の測定のための調査項目は「スポーツ（運動）に対して興味がありますか」である。また，スポーツ経験についての調査は小学校時代より調査実施時期までを調査対象期間とした。

2　データの分析

スポーツに対する興味の有無と各変数との関係を探るためχ^2検定を行ったが，有意差の見られる２×３以上の分割表を使用した変数については，残差分析も行った。残差分析の結果は表中の数値の右肩につけたアスタリスクにより示したが，†は有意傾向，＊は５％水準，＊＊は１％水準の有意性をそれぞれ表している。

連関の分析には２×２の分割表の場合ϕ係数を，２×３以上の分割表の場合クラメールの連関係数（Cr）を使用した。

なお，スポーツに対する興味の有無及びスポーツ経験に関する調査項目は，「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」までのリッカート尺度の４段階評定で構成されていたが，スポーツ経験については「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」を「当てはまる」に，また「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」を「当てはまらない」に統合し直し，分析した。

また，スポーツに対する興味の有無については，「非常に当てはまる」を「当てはまる」に，また「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」を「当てはまらない」に統合し直し，分析した。

Ⅲ　結果及び考察

1　目的変数と説明変数のクロス集計結果

1）個人的属性

表２は女子での目的変数（スポーツに対する興味の有無）と末子年令との関連を見ようとしたものである。χ^2検定の結果，末子の年令とスポーツに対する興味との間に有意差が認められたため，残差分析を行ったが，子供のいない人ではスポーツに対して興味を持つ人が少なく，興味を持たない人が多く見られる。また，末子が高校生・大学生の場合，有意傾向が認められ，スポーツに対して興味を持つ人が多く，興味を示さない人が少なくなっている。

表２　目的変数と末子年令のクロス集計結果（女子）

	子供いない	就学前	小・中学生	高・大学生	社会人
スポーツに興味がある	26.1**	54.5	57.7	67.9†	52.2
スポーツに興味がない	73.9**	45.5	42.3	32.1†	47.8
	(N＝23)	(N＝33)	(N＝52)	(N＝28)	(N＝23)

χ^2＝9.665　＊P＜.05

2）小学校時代のスポーツ経験

表3は目的変数と小学校時代のスポーツ経験の関連を見ようとしたものである。男女とも8つの説明変数のすべてに有意差が認められたが，女子に比べて男子の方にφ係数の大きい変数が目立っている。

表3　目的変数と小学校時代のスポーツ経験のクロス集計結果

	説明変数	男子			女子		
		χ^2	P	φ係数	χ^2	P	φ係数
小学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	7.947	**	.235	8.877	**	.234
	休日などに自由に運動した	29.633	***	.428	6.410	*	.199
	地域のスポーツ大会などによく参加した	17.917	***	.334	12.277	***	.275
	楽しかった	16.369	***	.317	11.172	***	.263
	充実していた	22.226	***	.369	8.381	**	.228
	健康に役立った	24.909	***	.391	17.251	***	.326
	仲間づくりに役立った	32.581	***	.447	20.060	***	.352
	よい思い出がある	20.003	***	.360	16.401	***	.327

*P＜.05　**P＜.01　***P＜.001

最も大きな値を示したのは男女とも「仲間づくりに役立った」であり，小学校時代のスポーツ経験は仲間づくりに役だった，と回答した人に，スポーツに対して興味を持つ人が多い。

スポーツ事業に対応したスポーツ経験では，スポーツ・クラブ経験者のスポーツに対する欲求，興味・関心の高さはよく指摘される所であるが，小学校時代にスポーツ・クラブに所属して活動していた経験を持つ人に他の運動者群よりもスポーツに対して興味を持つ人が常に多いわけではなく，男女とも地域のスポーツ大会によく参加したとする人にスポーツに対して興味を持つ人が多く見られる。また，休日や放課後などに自由に運動したスポーツ経験を持つ人の内，相対的に男子ではスポーツに対して興味を持つ人が多いが，女子では男子ほど多くなく，小学校時代の自由な運動と現在のスポーツに対する興味の有無の関係に男女差が見られる。

小学校時代のスポーツ経験は「楽しかった」「充実していた」「健康に役だった」「よい思い出がある」というスポーツ活動に伴う認知面の変数では，いずれも男子の値が女子を上回っており，男女差が見られる。

3）中学校時代のスポーツ経験

表4は目的変数と中学校時代のスポーツ経験の関連を見ようとしたものである。男女とも8つの説明変数のすべてに有意差が認められたが，特に女子の場合，すべての説明変数に0.1％水準の有意差が認められた。

最も大きなφ係数値を示したのは，男女とも「スポーツ・クラブに所属した」であり，中学校時代にスポーツ・クラブへの所属経験を持つ人は，男女とも他の運動者群よりもスポーツに対して興味を示す人が多く，小学校時代のスポーツ・クラブ所属経験者よりも明確な傾向を見せている。

表4　目的変数と中学校時代のスポーツ経験のクロス集計結果

	説明変数	男子			女子		
		χ^2	P	ϕ係数	χ^2	P	ϕ係数
中学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	21.398	***	.362	21.535	***	.365
	休日などに自由に運動した	16.578	***	.319	12.086	***	.274
	地域のスポーツ大会などによく参加した	12.791	***	.280	15.189	***	.306
	楽しかった	8.265	**	.226	13.411	***	.288
	充実していた	6.417	*	.198	12.345	***	.276
	健康に役立った	18.880	***	.340	11.218	***	.263
	仲間づくりに役立った	16.578	***	.319	11.141	***	.262
	よい思い出がある	7.985	**	.224	11.973	***	.279

*P<.05　**P<.01　***P<.001

男子で女子よりも大きなϕ係数を示したのは「休日などに自由に運動した」「健康に役だった」「仲間づくりに役立った」の各変数であり，女子の方で大きな値を示したのは「地域のスポーツ大会などによく参加した」「楽しかった」「充実していた」「よい思い出がある」の各変数である。

4）高校時代のスポーツ経験

表5は目的変数と高校時代のスポーツ経験の関連を見ようとしたものである。男女とも8つの説明変数のすべてに有意差が認められた。

表5　目的変数と高校時代のスポーツ経験のクロス集計結果

	説明変数	男子			女子		
		χ^2	P	ϕ係数	χ^2	P	ϕ係数
高校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	11.925	***	.270	22.234	***	.370
	休日などに自由に運動した	10.015	**	.248	9.086	**	.238
	地域のスポーツ大会などによく参加した	12.164	***	.274	12.155	***	.275
	楽しかった	13.789	***	.291	14.587	***	.300
	充実していた	18.900	***	.341	10.041	***	.249
	健康に役立った	28.656	***	.338	11.480	***	.266
	仲間づくりに役立った	23.128	***	.377	14.391	***	.298
	よい思い出がある	23.015	***	.380	9.263	**	.243

**P<.01　***P<.001

男子では高校時代のスポーツ経験は「健康に役だった」「仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」の各変数が他の変数と比較して大きなφ係数値を示し，また，女子の値を上回っている。

女子では「スポーツ・クラブに所属した」が最も大きな値を示しており，高校時代にスポーツ・クラブに所属していた人に現在スポーツに対して興味を持っている人が多く見られるが，男子の値は女子ほど大きくなく，男女差が表れている。

「休日などに自由に運動した」は男女共に全変数の中で最低の値を示しているが，高校時代の日常生活の中での手軽な運動と現在のスポーツに対する興味は関連性はあるものの，他のスポーツ事業に対応したスポーツ経験ほど強い関連性を持たないと考えられる。

5）19才～22才のスポーツ経験

表6は目的変数と19才～22才のスポーツ経験の関連を見ようとしたものである。男女とも8つの説明変数のすべてに有意差が認められた。

表6　目的変数と19才～22才のスポーツ経験のクロス集計結果

	説明変数	男子			女子		
		χ^2	P	φ係数	χ^2	P	φ係数
19才～22才のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	22.657	***	.385	18.890	***	.353
	休日などに自由に運動した	12.079	***	.282	23.597	***	.394
	地域のスポーツ大会などによく参加した	8.212	**	.232	10.606	**	.263
	楽しかった	18.171	***	.347	13.727	***	.302
	充実していた	15.185	***	.318	11.899	***	.281
	健康に役立った	18.217	***	.346	9.395	**	.249
	仲間づくりに役立った	21.065	***	.372	12.740	***	.290
	よい思い出がある	15.909	***	.328	14.059	***	.311

**P＜.01　***P＜.001

「スポーツ・クラブに所属した」は男女ともに大きな値を示しており，19才～22才のスポーツ・クラブ所属経験と現在のスポーツに対する興味は強い関連性を持つと考えられる。また，男子では「仲間づくりに役だった」も高い値を示している。

「休日などに自由に運動した」は男子では0.1％水準の有意差が認められるものの，他の変数と比較して相対的にφ係数値が小さい。一方，女子では高校時代まで低かった値が急上昇し，女子の全変数の中で最大の値を示すとともに，男子の値をも上回っており，日常の生活の中で手軽な運動を行った経験を持つ人に現在スポーツに対して興味を持つ人が多く見られる。

「地域のスポーツ大会などによく参加した」は男女とも他の変数と比較して相対的に係数値が低く，スポーツに対する興味との関連性は他の変数ほど高くないと考えられる。

「健康に役だった」は男子では高い値を示しているが，女子では全変数中で最低の値を示しており，スポーツに対する興味の有無に男女差が見られる。

6）23才以降のスポーツ経験

表7は目的変数と23才以降のスポーツ経験の関連を見ようとしたものであるが，男女とも8つの説明変数のすべてに0.1%水準の有意差が認められ目的変数との強い関連性が見られるが，特に男子では他の時代区分と比較して大きなφ係数値を示す変数が多く見られる。

表7　目的変数と23才以降のスポーツ経験のクロス集計結果

	説明変数	男子			女子		
		χ^2	P	φ係数	χ^2	P	φ係数
23才以降のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	22.207	***	.369	12.732	***	.286
	休日などに自由に運動した	23.482	***	.380	18.145	***	.342
	地域のスポーツ大会などによく参加した	20.032	***	.352	14.073	***	.301
	楽しかった	38.819	***	.488	17.142	***	.333
	充実していた	36.077	***	.470	17.556	***	.338
	健康に役立った	47.127	***	.539	12.969	***	.290
	仲間づくりに役立った	32.471	***	.446	18.398	***	.347
	よい思い出がある	20.953	***	.362	19.600	***	.364

***P<.001

男子で最大のφ係数値を示したのは「健康に役だった」であり「楽しかった」「充実していた」「仲間づくりに役だった」と続いているが，いづれもスポーツ経験に伴う認知面に関係した変数であり，具体的なスポーツ活動経験よりも認知経験の方にスポーツに対する興味との強い関連が見られる。

女子にもこの傾向が男子ほど強くはないながらも表れており，「よい思い出がある」をはじめとした認知面に関連した変数のφ係数値の大きさが目立っているが，また一方では特徴的な面も見られる。即ち，男子では認知に関連した5つの変数のすべてが具体的なスポーツ活動経験を上回っていたが，女子では「休日などに自由に運動した」が認知面に関係した変数に劣らない値を示しており，女子においては休日や平日の自由時間に手軽な運動を行った経験を持つ人にスポーツへの興味を有する人が多いことを物語っている。

「スポーツ・クラブに所属した」は男女とも相対的に値が低い。通常，スポーツ・クラブに所属し活動している人は，運動欲求や運動に対する興味・関心が比較的強い[5]とされており，プログラム・サービスやエリア・サービスに対応して活動する運動者よりも運動に対して強い興味を有していると考えられているが，現役のクラブ員だけでなく所属経験のある人をも対象者としている本研究では男女ともにそのような傾向は見られなかった。

以上は各時代別のスポーツ経験とスポーツに対する興味の有無の関連性についてのχ^2検定及び連関分析の結果であるが，総体的に見て男子の方に女子と比較して，高い有意水準を示し，強い連関の見られる変数が多く見られたものの，中学校時代のスポーツ経験では女子の方に高い有意水準を示す変数が多く見られた。

個別の変数を時系列的に考察すると「スポーツ・クラブに所属した」は男子では「中学時代」「19才～22才」で変数群の中で最大のφ係数値を示した。また，女子では「中学時代」「高校時代」で変数群中の最大値を示しており，スポーツに対する興味と強い関連性を持っていることがわかった。しかし，他の時代区分ではスポーツ活動に伴う認知関連変数や他のスポーツ経験変数群よりも低い値を示しており，特に後者との関連では，スポーツ・クラブ経験者が常に他の運動者群よりもスポーツに対して強い興味を持っているとはいえない，ということがわかった。

「休日などに自由に運動した」は男子では「小学校時代」でスポーツ経験変数群の中で最大の値を，また全変数の中で2番目の値を示した。このことは，小学校時代に放課後や休み時間などの自由時間を使って学校や地域で自由に，手軽な運動を行った人に現在スポーツに対して強い興味を持っている人が多いことを示しており，この年代の自由な運動の重要性を示唆すると共に，自由に運動できる運動環境の整備の必要性を示している。

また，女子では「小学校時代」から「高校時代」までは全変数及びスポーツ経験変数群の中で，相対的に低い値しか見られないが，「19才～22才」「23才以降」ではスポーツ経験変数群の中だけではなく，全変数の中でも目立つ大きな値を示している。このことは19才以降に友人や家族と自由に手軽な運動を行った経験を持つ人にスポーツに対して強い興味を持つ人が多い，ということであり，男子の「23才以降」の結果とも相俟って，既存の運動施設の一般開放の推進，近隣での小規模な運動施設の建設などエリア運動者が手軽に，自由に活動出来る運動環境の整備にもっと配慮が払われる必要のあることを示している。

スポーツ活動に関連した認知面の変数である「健康づくりに役立った」は男子の全時代区分を通して.3以上のφ係数値を示したが，「23歳以上」でφ係数値.539という男子の全時代区分の全変数中の最高値を示しており，スポーツに対する興味と深く関わりのある変数であると考えることができる。しかし，女子では.3以上の値を示したのは「小学校時代」のみであり，男女差が見られる。

「仲間づくりに役だった」は男子では全時代区分を通じてφ係数値.3以上の値を示し，また，「小学校時代」と「23才以降」では.4以上の値を示しているスポーツに対する興味と関係の深い変数であると考えられるが，女子では「小学校時代」と「23才以降」で.3以上が見られるだけで，他の時代区分では.2レベルに止まっており男子ほど明確な連関が見られない。

2　目的変数を規定する要因の分析

表8は目的変数（スポーツに対する興味の有無）と説明変数の連関係数（φ係数）であり，連関係数の大きさにより順位をつけ，上位20位までを掲載した。

上位20位までの時代区分から見た内訳は男子では「23才以降のスポーツ経験」8個，「小学校時代のスポーツ経験」5個，「19才～22才以降のスポーツ経験」4個，「高校時代のスポーツ経験」2個，「中学時代のスポーツ経験」1個である。また，女子では「23才以降のスポーツ経験」7個，「19才～22才のスポーツ経験」5個，「高校時代のスポーツ経験」3個，「小学校時代のスポーツ経験」3個，「中学校時代のスポーツ経験」2個となっている。

「23才以降のスポーツ経験」は男女とも上位10位以内に5個入っており，したがって，時代区分で見た場合，男女とも23才以降のスポーツ経験がスポーツに対する興味を最も規定している，と考えられる。

表８　目的変数と説明変数との連関

説明変数		男子		女子	
		φ係数	順位	φ係数	順位
小学校時代のスポーツ経験	休日などに自由に運動した	.428	6		
	充実していた	.369	13		
	健康に役立った	.391	7	.326	12
	仲間づくりに役立った	.447	4	.352	6
	よい思い出がある	.357	17	.327	11
中学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.362	15	.365	3
	地域のスポーツ大会などによく参加した	.306	14		
高校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した			.370	2
	楽しかった			.300	17
	仲間づくりに役立った	.377	11	.298	18
	よい思い出がある	.380	10		
19才～22才のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.385	8	.353	5
	休日などに自由に運動した			.394	1
	楽しかった	.347	19	.302	15
	健康に役立った	.346	20		
	仲間づくりに役立った	.372	12	.290	20
	よい思い出がある			.311	13
23才以降のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.369	14		
	休日などに自由に運動した	.380	9	.342	8
	地域のスポーツ大会などによく参加した	.352	18	.301	16
	楽しかった	.488	2	.333	10
	充実していた	.470	3	.338	9
	健康に役立った	.539	1	.290	19
	仲間づくりに役立った	.446	5	.347	7
	よい思い出がある	.362	16	.364	4

注：χ^2検定の結果５％水準以上の有意差を示した変数のφ係数を求め，上位20位までを掲載した。

男子の２位は「小学校時代のスポーツ経験」であるが，女子の２位は「19才～22才のスポーツ経験」であり，女子では高校卒業後のスポーツ経験とスポーツに対する興味の連関が強く，学生時代のスポーツ経験とスポーツに対する興味の連関は相対的に強くないのに対して，男子では時代区分で現在とは最も離れた位置にある「小学校時代のスポーツ経験」とスポーツに対する興味の連関が強く，男女差が見られる。

上位10位までの変数別に見た内訳は男子で「休日などに自由に運動した」2個,「仲間づくりに役立った」2個,「健康に役だった」2個,「スポーツ・クラブに所属した」1個,「楽しかった」1個,「充実していた」1個,「よい思い出がある」1個である。また，女子では「スポーツ・クラブに所属した」3個,「休日などに自由に運動した」2個,「仲間づくりに役だった」2個,「楽しかった」1個,「充実していた」1個,「よい思い出がある」1個である。

また，上位20位までの変数別に見た内訳は男子で「仲間づくりに役だった」4個,「スポーツ・クラブに所属した」3個,「健康に役立った」3個,「よい思い出がある」3個,「休日などに自由に運動した」2個,「楽しかった」2個,「充実していた」2個,「地域のスポーツ大会などによく参加した」1個である。また，女子では「仲間づくりに役だった」4個,「スポーツ・クラブに所属した」3個,「楽しかった」3個,「よい思い出がある」3個,「休日などに自由に運動した」2個,「地域のスポーツ大会などによく参加した」2個,「健康に役立った」2個,「充実していた」1個である。

上位20位以内で男女ともに最多の変数であった「仲間づくりに役だった」は上位10位以内でも男女とも2個ずつランクされており，男女に共通してスポーツに対する興味を規定する変数であると考えられる。また,「休日などに自由に運動した」や「よい思い出がある」なども男女に共通してスポーツに対する興味を規定していると考えられる。

一方，上位10位以内で見ると,「健康に役立った」は男子ではランクされているが，女子ではランクされていない。また，20位以内を見ても男子の方が女子を上回っており,「健康に役立った」という変数は男子のスポーツに対する興味と連関の深い変数であると考えられる。

「スポーツ・クラブに所属した」は上位20位以内では男女同数であるが，上位10位以内では女子の方が上回っており，女子のスポーツに対する興味と連関の深い変数であると考えられる。

Ⅳ　要　　約

本研究では過去のスポーツ経験及びスポーツ活動に伴う認知的側面とスポーツに対する興味との関連を検討することにより，いつ頃の，どのようなスポーツ経験及び認知経験が現在のスポーツに対する興味と連関が深いかを探ろうとしたが，結果は以下のように要約できる。

1．χ^2検定の結果では，男女とも有意水準のちがいはあるものの，すべての時代区分のすべての変数で有意差が認められた。

　総体的に見ると，中学校時代だけは女子が上回っているが，男子の方に女子と比較して高い有意水準を示し，目的変数と強い連関の見られる変数が多く見られた。

2．時代区分別に見て，スポーツに対する興味と連関が高い変数が多いのは男女とも「23才以降のスポーツ経験」であったが，次いで連関が高い変数が多いのは男子では「小学校時代のスポーツ経験」，女子では「19才～22才のスポーツ経験」となっており，男子には学生時代のスポーツ経験との関係が強く表れているのに対して，女子では男子ほど強く表れておらず，男女差が見られる。

3．個別の変数では,「仲間づくりに役立った」「休日に自由に運動した」「よい思い出がある」などは男女に共通した変数であると考えられるが,「健康に役立った」「スポーツ・クラブに所属した」などは男女差の見られる変数であると考えられる。

　本研究ではスポーツ経験の実態を被調査者の回想を手がかりに把握しており，正確なデータを

得難いという弱点を持つため，正確なデータを得るための研究方法の検討を今後の課題としたい。また，23才以降のスポーツ経験の細分化の必要性も感じており，今後の課題としたい。

本研究では山口県教育委員会のご理解を得て，調査データを使用させて頂いた。ここに記して謝意を表する次第である。

注

注１）　この調査は山口県教育委員会の依頼により山口大学教育学部岡村豊太郎，遠藤勝恵の両氏がフィシュベインの「行動意図予測モデル」などを参考にしながら作成した調査票を使って行われた。

引用・参考文献

1）　金崎良三：「スポーツ行動の予測と診断」，徳永幹雄他著『現代スポーツの社会心理』，遊戯社，1985，P.65

2）　福元和行・遠藤勝恵：「スポーツの楽しさの認知と過去のスポーツ経験の関連性に関する研究」，鳥取大学教育学部研究報告，教育科学，第38巻，第１号，1996

3）　加賀秀夫：「運動学習に関与する心理的要因」，松田岩男編『運動心理学入門』，大修館書店，1976，P.106

4）　松田岩男：『現代スポーツ心理学』，日本体育社，1973，P.23

5）　中村平：「運動者と運動者行動」，宇土正彦・八代勉他編『体育経営管理学講義』，大修館書店，1989，PP.45～46

6）　徳永幹雄・橋本公雄他：「スポーツ行動の予測因に関する研究(2)－心理的・身体的要因について－」，健康科学，第３巻，PP.72～85，1981

7）　徳永幹雄・橋本公雄他：「学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究－心理的・身体的要因について－」，健康科学，第４巻，PP.36～49，1982

8）　宇土正彦：『体育管理学』，大修館書店，1983

9）　森川貞夫・佐伯聰夫編著：『スポーツ社会学講義』，大修館書店，1988

10）　小林利宣編：教育・臨床心理学辞典，北大路書房，1981